避けようとしたが、避け切れないで、小鬢をサーッと斬られてしまつた。

『どうか、お助け下さい。』

轉びながら、逃げるのを追ひ討ちに三の太刀、狙ひ外れて馬の鞍へ斬りつけたから、驚いた馬は、後足を上げると、其の武士を、いやと云ふ程蹴飛ばしてしまつた。

餘りの事にカッと怒つた侍達、てんでにギラリ〳〵と刀を拔いて、佐太郎に斬りつけようとしたとき、

ドーン〳〵〳〵！

遠くの方から聞えて來る太鼓の音。

『あッ、糶賣が始まる。もう駄目だ。』

佐太郎は、武士の方を振り向くと、

『お侍、もう逃げやしません。佐太郎はどの面提げて村へ歸れませう。よろしい。神妙に討たれてしまひませう。さあ殺してお臭んなさい。』

『い〳〵覺悟だ。討つてやるぞ。』

馬に蹴られた武士は、サッと刀を振りかぶつた。

六

其の頃、鎭守の八幡宮の境内では、糶賣が始まつて居た。堆高く積み上げられた百俵の米を中に、二つの村は兩方に分れて、買はうとする金高を云ひ合つてゐる。

『百兩ッ。』藤作が云ふ。

『百二十兩。』治兵衞が云ひ返す。

『何の、百三十兩。』

『よし、百四十兩。』

『えゝッ、百四十五兩。』

「面倒だ、百五十兩。」

「百五十三兩。」

「藤作、吝臭いことを云ふな。百六十五兩だ。」

「それなら、百七十兩だ。」

百八十兩、百九十兩、二百兩。

初め百兩と云つたものが、とう〳〵二倍の二百兩になつてしまつた。村の生死だけに金のことなんかは云つてられないない。

「二百十兩。」藤作の聲は物凄く響く。

「なあに、二百二十兩。」治兵衞の聲は、どこまでも意地惡く聞える。

「二百二十三兩。」

「よし、二百三十兩。」

藤作の顏が、サッと蒼色に變つた。

「藤作さん、どうしたのだ。早く次を出して下さい。」

村人の一人が心配顏に云ふと、藤作は首を振り乍ら、

「出すにも出さんにも、金がない。」

「えッ、もうおしまひか。」

「それでは、百俵は隣村に取られてしまふのか。」

之を見た治兵衞は、

「おい、藤作どん、氣の毒だが、百俵の米は儂の村の物だ。後から苦情を云うて吳れるな。」

其の時、息を切らして、駈けつけて來たのは、村の勘助。

「藤作さん、名主さん、出來たぞ、金が。二十兩だ、二十兩だ。」

「おゝ、勘助さん、有難う〳〵。どうして出來たのだ、二十兩と云ふ大金が。」

「何でも儂の祖父の代から傳はつたと云ふ刀を賣りましたちや。先祖は武士で

も百姓の儂には用がないと思ふてな。』

『さうかい、有難う。よーし、ソラ、二百四十三兩だ。』

それを聞いた治兵衞は慌てゝ下男に向つて、

『おい、急いで家に歸つて、儂の手文庫を持つて來い。早くしろ、此處にはもう金がないのだ。』

治兵衞が下男を吾が家へ走らせたとも知らずに、もう百俵の米は自分等の村に落ちたものと、藤作と勘助を圍んで大喜びに喜んで居る村人を見廻して、勘助は急に思ひ出したやうに、

『おゝ、さうだ。スッカリ忘れて居たが、佐太郎の阿母は居ないか。佐太郎が大變だ。』

『勘助さん、此處に居ますが、佐太郎がどうかしましたか。』

『おゝ、どうかしたもしないもない。大變だ〳〵、儂が城下から歸らうとして峠まで來かゝると、佐太郎どんが、大勢の拔身を持つた侍に取り圍まれて、今にも斬られさうぢやつた。儂は糶賣のことが氣になるし、早く名主さんに金を屆けて、此の事を皆に知らせようと思つて、急いで駈けて來ましたのぢや。』

『えゝッ、それでは佐太郎が？』

『おゝ、大變ぢや。皆の衆、早う行つてやつて下され。』

『さうぢや、行つてやれ〳〵。』

皆が佐太郎を救ひに行かうとしたとき、

『藤作、儂の村では、三百兩出すぞ。米はスッカリ儂の村のものだ。』

寢耳に水の治兵衞の聲。藤作を初め、村の人達は佐太郎を救ふことも忘れて、思はず其の場に泣き倒れてしまつた。

七

一方、峠の佐太郎は、糶賣の太鼓を聞いて、スッカリ諦めてしまつた。

『阿母さん、村の衆、永々お世話になりました。御恩も返さず、死んで行く佐太郎をお赦し下さい。』

手を合せて村の方を拜むと、グッと首を差し伸べた。

『覺悟しろ。』

太刀を振りかぶつた侍、今にも打ち下さうとした。

其の時、

『待てッ。』

急に、先刻から馬の上で默つて見て居た武士が、大聲を上げて制止した。

刀を振り上げた侍が振り向くと、馬上の武士はヒラリと飛び下りて、ツカツカと佐太郎の側に近づいて來た。

『そなたは、もしや佐太郎殿とは申されぬか。』

『え、いかにもわしは佐太郎と申す馬士でございますが。』

『やつぱり左樣か。佐太郎殿、拙者の顏をお覺えではないか。』

笠を取つた其の武士、佐太郎はヂッと見て居たが、

『わたしには、お前さんのやうな立派なお武士の知り合ひはない筈だが。』

『それではもうお忘れになつたか。恰度今から五年前、そなたは同じ此の街道筋で、一人の尾羽打ち枯した浪人を、三人の馬士に苦しめられて居たのをお救ひ下された覺えはござらぬか。そして其の浪人者に握飯を與へ、此の麓の城下まで馬で送つてやられた覺えはないか。』

『おゝ、さう云へば成程、そんなこともありましたよ。お武士はよく御存じでございますね。』

『忘れてなるものか。其の時の武士こそ、何を隱さう此の拙者ぢや。』

『えゝッ、それぢや、貴方があの時のお侍。御立派になられましたなあ。子供心に出世なされると云つたことが圖にあたつたのでございましたね。』

『先刻からの無禮の段々はお赦し下され。あの時そなたに助けられたお蔭で、今ではさる中國の大名に仕へて、勘定役筆頭に迄出世致した。今日は江戸から國表へ、公金一千兩を預かつて持ち歸る所、圖らずそなたに逢うて此の上もなく嬉しう存ずる。』

『わたしも嬉しうございます。』

二人は嬉しさの餘り涙を流して喜んで居たが、フッと糶賣のことを思ひ出した佐太郎。

『おゝ、お武家さま、わたしはこうしては居られませぬ、どうか御免なすつて。』

馬に飛び乘らうとするのを押し止めた武士、

『佐太郎どの、何か急用でもござりまするか。』

『おゝ、急用も急用。愚圖々々して居りや糶賣の間に逢はず、村の人が餓ゑ死んでしまひます。城下へ一刻も早う此の馬を賣りに行かねばなりませぬ。』

『左樣か、此の邊一帶、飢饉のことは聞き知つて居りましたが、御身の村で糶賣がありまするか。よろしい、佐太郎どの、其の馬賣ること無用でござるぞ。』

『でも……』

『御心配なされるな。彼の馬に積んだ一千兩の金、そつくりそなたにお讓り申さう。』

『えッ、それでは彼の金を？　でもそれは、貴方の金ではない……』

『構はぬ。拙者の路金と申しても五十兩にも足らぬ金、所詮之では用達ちますまい。彼の千兩箱は公金ではござるが、多くの人の生命には替へられぬ。殿にもよもお咎めはあるまい。若し咎められても拙者の腹一つ切ればそれでよいのぢや。恩義に報ゆるに死を以てすることこそ眞の武士の道でござらう。』

『は、はい、有難うございます。』

『さあ、早うせられい。時遅れては無になり申す。急ぎ行かれい。』

『有難うございます。ではお言葉に甘へて、頂戴致します。』

ヒラリと馬に飛び移ると、千兩箱をしつかと鞍にくゝりつけて、ビシリと一鞭呉れると、

『お武家さま、御免。』

一散がけに峠を駈け下ると、鎭守の森へ。

八

『三百兩、三百兩、もう上は出ませぬか。出なければ治兵衞さまの手に落しまするぞ、落しまするぞ。』

藤作の村の人々は、泣き喚いたが、どうにもならない。治兵衞のせゝら笑ひを恨めしさうに睨むばつかり。

『落しまするぞ、ようございますね、落しまするぞ。』

米商人の聲が段々高くなつて行く。

『落しますぞ、さあ……』

『待つて下さい。』

佐太郎の母親が叫んだ。

『上があるのですか、幾何々々？』

『いゝえ、お願ひです。佐太郎が歸つて來るまで、待つて下さい。』

『でも佐太郎どんは、峠で侍に……』

勘助の云ふのを打ち消すやうに、

『嘘だ、嘘だ、惡いことをしないものが、武士に斬られて堪るものかい。もし米屋さん、お願ひ……』

つか〳〵と側へ寄つて來た治兵衞、

『氣狂ひ婆、やかましいッ。今頃はお前の倅は、峠の上で赤い血を出して午睡

をしてらあ。……おい、米屋さん、何時まで待つても無駄だ。早く儂の村へ落してお呉れよ。』

『えゝ、それぢや落してよございますかね。落しますよ、落しますよ、よろしいか。』

今にも治兵衛の村へ落さうとした。

其の時！

鎭守の鳥居を通して、向ふの山の方へつゞく田圃の中の一筋道を、トツトツトツトツ、此方へ向けて駈けて來る馬蹄の音。

『おや、誰だらう。』

一同が伸び上つて見詰めて居ると、

『待つて呉れ、待つて呉れ。』

と叫ぶ聲が聞える。

『おゝ、佐太郎だ、佐太郎だ。』

眞先に言ひ出したのは母親であつた。

『賣りに行つた筈の青に乘つて歸つて來たのが氣懸りだが……もし米屋さん、伜が歸つて來ました。

あの通り。あの兒が此處へ來るまで、其の米は隣村へ落さずに置いて下され。あの兒は屹度金を持つて來ますから。』

『お婆さん、いゝとも。彼の人が來るまで、決して落しはしませんから。安心なさい。』

村の人々がてんでに佐太郎の名を呼んで居る中に、早くも其の場にかけつけた佐太郎、ヒラリと馬から飛び下りると、

『藤作さん、金が出來た。あれ、あの通り千兩箱が一つ。譯は後で話すから、早く糶り上げて下さい。』

『おゝ、佐太郎どん、村が助かります、有難う〳〵。』

藤作は聲を震はせながら、禮を云つて元氣よく躍り初めた。母親を始め、村の人々は佐太郎を取り圍んで、口々に無事を喜び、佐太郎も一同に向つて峠の出來事の始終を物語つた。

米は勿論、藤作の村に落ちた。皆の喜ぶのを眺めた佐太郎は、聲を張り上げて、

『皆の衆、成程米は儂の村に落ちた。こんな嬉しい事はない。然し、若し此の米が隣村の手に入つたとしたら、どうだらう。儂等はどんなに落膽したことだらう。喃、皆の衆、飢じいのはお互だ。どうか此の米の半分を隣村に分けてやつて下さらぬか。お願ひだ。』

佐太郎の云ふのを聞いて、皆は初めて其處に氣づいた。

『さうだ〳〵、佐太郎どんの言ふ通りだ。隣村の人達の事も考へてやらねばならぬ。

口々に云ひ合つて、誰も反對するものはなかつた。之を聞いた治兵衞の眼にも、いつか大粒の涙が浮んで居た。

○結　び

間もなく、治兵衞と藤作は隱居したので、村人に推された佐太郎は其の後を受けて、二ケ村の名主となつた。其後も、母を勞はりながら、村の爲人の爲に盡すことを怠らなかつた。翌年の秋、此の二ケ村は、今までにない豐作であつた。

扨、例の武士はどうしたらう。

あの事があつてから二ケ月ばかり後のこと、佐太郎の許へ一通の書面が屆いた。

それには次のやうな事が書いてあつた。

歸國の後、切腹を覺悟して例のことを言上した所、恩人の爲に費し、多くの人の生命を救うた金ならば、千兩が萬兩でも惜しくはないとの仰せで、却つてお褒めに預かり、一躍家老の末席に加へられて面目を施した。何卒お喜び下され。云々。

それが、例の武士からの便りであることは言ふまでもないであらう。

運命の絲

注意

主眼點　題そのものに依つて既に暗示されてゐるでせう。それと共に眞心からの信賴は何物にも犯されないと云ふ氣持を表はしたい。

時間　五十分。

聽衆　處女會、婦人會等。

其他　調子はゆつくりと、會話の際も餘り差別を付けない方が良い。二、五の終りと七を注意して下さい。處々微かな笑ひの入る所があります。沈む話ですから夫等を效果あらしめる樣に。少し地の文が多い樣ですが取捨出來ると思ひます。地理的概念を與へる爲に地名等の說明も適宜に挿入して下さい。

これは英國の小說家コナン・ドイルの作を實演向きにしたものです。

○枕

大宇宙の何處かに、僅かにぽつりと存在して居るに過ぎない此の地球の表面で、我々が起したり起されたりした小さな事件が取るにも足らない極めて些細な事であつても、それが互ひにもつれあひ働きあつて、非常に澤山な思ひも寄ら

ない事件を起して來るものです。例へば、今此處に或る海底の何處かで、一つの牡蠣がその貝の中へ入り込んだ小さな砂粒を包まうとして、或る分泌物を出す。するとそこに一個の眞珠が出來上つて參ります。眞珠採りの海士が之を見付け出して、そして之を仲買人に賣ると仲買人は又之を寶石商に賣ります。そこでお客は又寶石商の店先で之を見付けて買ひます。處が不幸にもその買つたお客の家へ强盜が入つて、主人を殺してその眞珠を奪つて逃げました。然しその盜賊は間も無く警察に捕へられて遂に死刑臺の上にのぼされた　――（僅かのポーズを置いて）――としたなら、二人の人間の命を斷つと云ふ相當に大きな事件が、僅かに牡蠣が分泌物を出して砂粒を包んだと云ふ小事から始つたに過ぎないものです。ほんとに一寸した事だと思つても、それから運命の絲に繰られて大きな悲劇を起し、大きな喜びをもたらすと云ふ事實は此の世に珍しくない事です。それと一緒に私達は運命の、宿命の不可思議な事にも唯驚くのみです。

之から此の不可思議な運命の下にもてあそばれた男女のお話を致します。

○本話

一

今から百年程以前、英國のブリストルと云ふ海岸の町に、ジョン・ハックスフオドと云ふ若者が住んで居ました。未だ若い身空ではあつたが、その町のフエアベアンと云ふコルク製造工場の職工長を務めて居つた。

此の若いハックスフオドはもう二週間もすると結婚する事になつて居て、世の中の幸福は皆自分の所へ集まつて來てゐるのだと思はれる位でした。何をしても愉快だ。自分の職務が此程に愉快に運ばれて行く時は無からうと思ふ程でした。

然し運命の絲は慘酷なものです。此の幸福なハックスフオドの身を何んな風にその絲が繰つていつたでせうか。

恰度其頃遙かに離れたスペインで、一人のコルク栽培家が自分の大きな資本を投下してそこに工場を設けて大規模にコルク製品の生産を始めました。元來がコルクの原料はスペインの山地から産出するものであつて、然もその土地の勞銀は安い。で忽にしてスペインに於けるコルク製造業は大きな發展をし始めた。そして此の新しい競爭者の爲に他國に在る大工場は少からぬ打擊を受け、小工場に至つては破產に瀕しなければならない程となつた。

二

前に云つた英國のブリスポートの町に小規模乍らも健實に此のコルク製造業として永い間立つて居たフエアベアン工場も、矢張スペインのコルクに壓倒されて、一般の小工場と同じく破產の運命に立ち至つて仕舞つたのであつた。

冬も近く霧の深い陰氣な或る土曜日の午後、その日はフエアベアン工場の職工達が最後の給料を受取る日でした。

皆默つて出された賃銀を默つて受け取つて行きました。最後の賃銀が渡されて出納係が立ち上つた時に此の工場の主人フエアベアン氏が云ひ始めました。

『諸君、諸君とお別れせねばならないことを私は悲しく思ひます。今日はなんたる惡日でありませう。我々の中に今日が來るのを、誰が豫想して居たでせうか。私は此の今日の來ない樣にと最善の努力を致して來ました。併し殘念ながら事態は益々惡化してゆきます。細い私の腕では何としても之を支へる事が出來ませんでした。何卒諸君があまり遠からぬうちに夫々適當な職を見出されて、幸福に暮されん事を私は祈つて居ります。では之でお別れです。さよなら。』

周圍に集まつて居た職工達は靜かにそれを聞いて居ました。話の終つた後も暫は皆默つて居りました。が間もなく一人の男が突然腰掛の上に立ち上つて云つた。

『諸君、お別れにフエアベアンさんの萬歲を三唱しませう。』

それは職工長のジョン・ハックスフオドであつた。

そこで集まつた人達すべてはそれに和して萬歳を唱へた。そして又一々の別れの挨拶が濟むと散々に工場を出て行きました。

一番最後に殘つた職工長のハックスフオドはやがて主人のフエアベアン氏にお別れの挨拶を述べました。

「あゝジョン、お前は子供の時から永い間よく勤めて呉れた。有り難う。が聞けばお前は今度の失職で一番誰よりも困るらしいが。」

「えゝ、實は私は間もなく結婚して一家を持つことになつて居たのです。ですからその爲には一番初めに仕事を見付けねばならない譯なのです。」

「氣の毒な事だ。それにお前は此處に許り居たので外の仕事に就く事は出來ないし、同じ仕事の工場では何處も彼處も今は人減らしをして居る狀態だから、缺員なんて一つもある筈はないんだからねえ。」

「それで私も考へてゐるのです。」

「それに就いてな、私は今お前に云ふのだが、此處にカナダのモントリールのシエリダンと云ふ工場から、宜い職工監督が一人欲しいと私の所へ云つて來て居るのだ。お前一つそこへ行つたらどうだい。給料も今迄取つて居たものの倍程出すさうだが。」

「えッ！　ほんとですか？　ありがたう御座います。」

とハックスフオドは思はず云ひました。が考へて見ると、カナダと云へば皆さんも御承知の樣にアメリカです。何千里と云ふ大西洋を横斷して行かねばならない所です。でもその中にハックスフオドは云つた。

「メーリと云ふのが私の嫁になる女の名前なんですが、メリーもきつとお世話して下さるあなたの御親切を喜ぶでせう。私も之で何處にも仕事口が見付からなかつたとすると、私の新しい家も滅茶苦茶になつて仕舞はねばなりません。私

は早速行く事に致します。何處へ行つても人情は同じでせうから。でも一應はメリーと相談したいと思ひますが、一寸の間お待ちが出來ないでせうか。』

『あゝ、宜いとも。郵便は明日來る筈だから今夜お前が自分で手紙を書いたらいゝ。こゝに先方の手紙があるから此の宛名で出したら宜いだらう。』

『どうも色々と有り難う御座います。』

とその儘ハックスフオドはフエアベアン氏の工場を出て來ました。外は霧が深くて邊りは唯ぼんやりと輪廓だけしか見えない位でした。でもハックスフオドは躍るやうな足どりで海岸町のくねゝした通りを幾度も〳〵曲つて、一軒の白塗りの小さな家の前へやつて來ると、その儘返事も待たずに中へ入つて行きました。それは花嫁となるメリーの家だつたのです。ハックスフオドは這入るといきなり、

『メリーさん、僕達にも運が愈々向いて來たよ。』

『あゝ、ジョンさん、宜い事と云ふと結局工場を續けてゆくことになるのでせうか。』

『いや、なに、そこまではよくはないのだけれどは、フエアベアンさんが私に、カナダに口があるから行かないかと云つて下さるのだ。樂で給料が多いと云ふ譯なんだ。でメリーさんが贊成なら行かうと思ふのだが、メリーさんはどうだね。』

『どうつて、あなたの正しい宜い事だと思ふ事が一番私にも宜いことですわ。(ポーズを置いて靜かに)でもお婆さんが可哀さうね。海は大丈夫でせうか。』

と云ふと、傍ににこ〳〵と眺めて居たお婆さんは、

『あゝ、わしのことなら心配しないがいゝ。わしはお前達が連れて行つて呉れると云ふなら、何んのカナダ位未だ〳〵平氣だし、行くなと云ふなら留守をしてお前達の歸つて來た時に何時でも住めるやうに世話をして待つてゐるよ。』

それを聞くとハックスフオドは、

『勿論行つて貰はなきや困りますよ。お婆さんをあとに殘して行くなんて、そんな事は出來るものですか。ねえメリーさん、それ所か、向ふへ行つて結婚の式を濟まして、恁んな家を借りて三人で話をしたらきつと樂しいに違ひない。それに英國人はどつさり居るのだから、外國の氣持もしないだらうし。』

『それは勿論ですわ。』

とメリーも口を添へる。一家はもうカナダに渡つて、樂しい家庭を作つて仕舞つたかの樣に話込みました。

その中にハックスフオドは、

『では承知して宜いね？　僕は初めから皆承知して吳れるものと思つたけれども、一應は相談して見なければと思つてね。では僕が一先づさきに出發して向ふの樣子を見て、それから二人の來るのを待つことにしやうよ。』

と云ふと早速カナダのモントリールへ承諾の手紙を出しました。萬事の用意も出來て愈々遠いカナダへ唯一人でハックスフオドは出發する事になりました。

『ねえ、メリーさん、すぐ呼び寄せるからね。暫くだ、待つて下さいね。』

『えゝ、貴方から來いと云つて來る迄はきつと待つて居ますわ。』

『有り難う。』

恁うしてジョン・ハックスフオドは遙々とカナダへ大きな希望を胸に滿して旅立つて行つた。

三

ブリスボートに淋しく便りを待つて居たメリー達は、ジョンからの手紙を英國に於ける最後の港であるリバプールから受取りました。そして間もなくカナダの最初の港であるクエベックからの便りも受け取つた。それにはカナダの第一の印象等が細々と書いてあつた。メリー達が更に次々と來る手紙をどんなに

待つたことかは想像出來るでせう。

然し、その手紙は幾週待つても二人の家には投げ込まれなかつた。一年が間もなく過ぎた。まだ何の音沙汰も聞えて來なかつた。メリーは人に賴んで先方のシエリダン工場に問ひ合はせて見たが、その返事には唯、ジョン・ハックスフオドなる者が來ると云ふ手紙はあつたが到頭本人は來なかつた、と云ふ事が簡單に書かれてあるに過ぎなかつた。二年三年と經つうちに、口さがない町の人達は、ジョンはきつと向ふへ着くと直ぐ變名か何かで新しい生活に入つて、こちらを忘れたに違ひない、等と云ひ始めた。そして眞面目にジョンを待つメリー達を笑ひ合つて居つた。實際向ふの警察に紹介して調査して貰つても、そんな男は調べた事も無ければ扱つた事も無いと云ふ返事を得た丈であつた。ジョン・ハックスフオドに就いては全く手掛りが無いと云つて宜いのであつた。

でもメリーにはジョンの眞實を忘れる事が出來なかつた。ひたすらにジョンを信ずるのみであつた。時々お婆さんが、

「メリーや、ジョンさんは町の人の云ふ通り向ふへ着くと、何か良い事があつて心變りでもしたのぢやないかしら。」

と云ふ言葉を聞くと、メリーは何時も、さうぢやありません、と云ひ張るのであつた。

ジョンが出て行つてから恰度五年目に、お婆さんは、

「メリーや、ジョンさんからの便りは未だ無いかへ。ほんとにジョンさんはどうしたと云ふのだらう。でもあの人に限つてそんな人ではなかつたのだが。」

と云ひ〳〵して淋しく死んで行つた。

唯一人後に殘つたメリーは僅かな貯へと賃仕事等をしながら、貧しく淋しく、でも忍耐强くジョンを信じつゝ年月を過ごして行つた。何時しか十年と經ち廿

年と過ぎて、メリーの頭の髪には白いものが掛る様になつて來ました。

四

ではカナダへ渡つたジョン・ハックスフオドはどうしたと云ふのでせう。それには私達の一寸信じられない様な出來事が起つて居つたのです。

希望と勇氣に滿ちてカナダのクエベックに上陸したハックスフオドは、目指すモントリールの町へ通ふ乘合馬車が二日の後に出ると云ふので、とある宿屋に泊りました。幾らかでも儉約したいと云ふので、安いのを取柄とする裏通りの小さな宿屋に泊つて居つたのです。だがハックスフオドが普通の宿屋だと思つて泊つた此の家は、思ひも懸けない惡魔の家だつたのです。田舍からぼうつと出て來た土地を知らない者を引き込んで、丸裸體にする奴等の集まる所であつた。

さうとは知らないハックスフオドは一日町の見物に出て夕方になつて歸つて來た。甚く寒い晩であつた。冷えた身體を暖める爲に一本の酒を飮むとその儘ぐつすりと何の不安もなしに寢込んで仕舞つた。然し此の一本の酒の中には恐ろしい麻醉劑が入つて居つたのです。麻醉劑の爲にぐつすりと寢入つたハックスフオドは、自分の室に二人の男が這入り込んで目ぼしい物を探し取つて居る事杯は少しも知りませんでした。けれども藥の利きかたが惡かつたのか、ジョンが餘りに健康であつた爲か、未だ二人の男が探すに夢中になつて居る時に目が覺めた。見ると此の有樣です。ハックスフオドは一躍に飛び上ると近くに居た男を否と云ふ程突き倒した。それと一緒にもう一人の男の顏をぐいと突き上げた。二人の惡漢は此の猛烈な攻擊の爲に二人とも倒れて仕舞つた。併し不幸な事にハックスフオドも又その拍子に、ドタンと倒れるとその儘暫くは起き上られなかつた。外で樣子を見て居た此の家の婆さんが、飛び込んで來るとハックスフオドを押へ付けた。その隙に獲物を持つて來た一人の男は、思ひつ切りハ

ックスフオドをなぐりました。その爲ジョンはその儘氣を失つて仕舞つたのです。

婆さんは云ひました。

「あんまり甚く打ちすぎるぢやないか。骨の折れる音がしたよ。殺したら面倒な事を知つて居るだらう。」

「何、あの位にやらなきやあ、こつちがやられちまう所だつた。」

「でも殺さなくても宜さそうなものだ。（死體に觸れる形）おや、未だ呼吸はして居る樣だよ。だが頭の後が毀れて居るからとても持つまいよ。仕方のないお前達だ。」

「當り前さ、俺の此の顏を見て臭れ。」

婆さんは又云つた。

「さあ、お前達二人で此奴を片付けるのだよ。人に見付からない樣に何處かへ捨てゝおいで。それからポケット杯はすつかり探して證據になる物は皆出して、おや、此奴はお金が此れ許りかい。その時計もとつて置きな。」

婆さんに云はれる通り二人の男はさつさと仕事をしました。雪の上に捨てられたハックスフオドは、間も無く巡回の警官に發見せられて病院に送られた。

醫者は、十二時間も持つまいと云ふ診斷をしました。

やがて其の十二時間も經つた。然もハックスフオドは死なゝかつた。そして醫者達の介抱のお蔭か、自分自身の生活力の強さからか、ハックスフオドは一週間眠り續けて遂に起き上つた。集つて居る醫者達は、

「起きちやいかん。氣を靜めて居るのだよ。君の名は何と云ふのかね。」

「何處から來たのかね。」「何しに來たのかね。」「どうして殺られたのかね。」

（以上夫々ポーズな置いて）

『では外國人かも知れない。』

と云ふので今度は知つて居る限りの外國語できいて見たが、矢張り失敗に終つた。

それは無理ではなかつた。ハックスフオドは宿屋で氣を失つたその時から全然記憶を失つて仕舞つたのです。過去の出來事總てがジョンから離れ去つて仕舞つたのです。併し、馬鹿になつた譯では無かつた。健康が回復するに從つてジョンは一つ一つ子供の樣に言葉を改めて覺え初めた。すつかり回復して愈々退院する時には、ジョンは一通りの外國語の讀書を習ひ覺えて居つた。併し、ジョン。ハックスフオドには最早昔の英國、プリスボート、メリー、婆さん杯の記憶は全然浮ばなかつた。そして新しくジョン・ハーデイと云ふ名前を持つて世の中へ出て行つた。

五

間もなく此の新しいジョン・ハーデイはマッキンレーと云ふ工場の人夫に雇はれる事になつた。併し過去の事は全部忘失して仕舞つたとは云ふものゝ、ジョンの記憶力は元に戻つて居つた。新しく經驗する事はすつかり覺え込んで、忽ちにして社員に採用された。誠實で勤勉なジョンはトン〳〵拍子に地位を上げられた。地位の上るに從ひ、世間的に出世するに從つて、ジョンは記憶を失つて仕舞つた以前の自分を思ひ出さうとする心持が段々強くなつて來ました。

或日の事、それは既にジョンが工場の支配人にまで出世した時の事であつた。ハーデイは商賣上の事で近くに在つたコルク工場の一つを訪れた。職工長の案内で工場内を歩き廻りながら、無意識に小さなコルクを取り上げてナイフを出すと、忽ちに一つのコルクの栓を作つた。立派な栓であつた。それを見た職工長は、

『おや、ハーデイさん、貴方はコルク切りを前におやりになりましたね。』

『そんな事はありませんよ。私はコルクなんか切つたのは初めてです。』

『いや〳〵、餘程の腕を持たなければ恁んな栓は作れませんよ。ちやもう一度切つて見せて下さい。』

何度繰り返して見ても同じだつた。工場の人達は皆驚いて仕舞つた。本人の

ジョン・ハーデイは更に一層驚かされたのであつた。

『コルク、コルクの栓、自分はそれと何んな關係があつたのだらうか。元はコルクの職工だつたのだらうか。コルクの職工だとすると！』（ゆつくり考へる樣に）此處迄考へて來ると、その先は分る樣な分らぬ樣なぼんやりしたもので包まれて、結局頭がづき〳〵痛む許りであつた。

廿年卅年と過ぎてジョンの頭に白髪が交つて來る樣になると、自分の青年時代の事が思ひ出される樣な、思ひ出されない樣な氣持に毎日苦しめられて來た。

ジョン・ハックスフオドがカナダに渡つて恰度五十年の月日が過ぎた。五十年と云へば長いものです。頭の髮毛が雪の樣に白くなり、張り切つて居た筋肉がだらしなくなつて仕舞ふのでした。その年、ジョンは長年勤めて來た工場を引退して、何の友もなく淋しく餘生を送る事となつた。

退職して以來、ジョン・ハーデイは退屈な儘に毎日〳〵埠頭場に出て、水夫等の立働く樣子やエンヂンの響き杯を聞いて居ました。そして聞くともなしに遠くからやつて來た水夫達の言葉を聞く。すると何となく自分の胸を湧き立たせる樣な言葉を使ふ水夫達が居る。ブリスポート何々號などと云ふ船名を見ると、何となく心が躍つて來る。

『イギリス……ブリスポート。』

此の言葉は何處かで自分が使つた言葉に違ひないとジョンには思はれてならなかつた。

或日の事、何時もの樣に埠頭場へやつて來たジョン・ハーデイは、其處でブリ

スポートから來たと云ふ水夫と友達になつた。

『ねえハーデイさん、プリスポートは此處二三十年來と云ふものは素晴しい發展なんですよ。』

と其の水夫が云ふ。ジョンは、

『さうかい。私はプリスポートと云ふと何だか懷しくてならないんだ。町の話等して呉れないか。』

『プリスポートの停車場の大きくなつた事つたら、さうだね、此の港一杯位なんですよ。それからピット町の野原も家が立ち混んだし、ハイ町へ來ると立派な住宅地になつて居ますよ。』

恰度話がハイ町に來た時ジョンは急に、（性急に）

『では、そのハイ町の次がフオックス町、それからカロリン町、チョーチ町と云ふ順序ではなかつたかね。』

『おゝ、その通りですよ。貴方は知つてゐるのかね。』

『おゝ、やつと思ひ出せた。メリーだ、ブリスポートだ、お婆さんだ。私はどうして今まで思ひ出せなかつたのだらう。』怎うして此の時を限りとして到頭ジョン・ハーデイはジョン・ハックスフオドとなつた。昔の記憶がすつかり甦つたのです。イギリス、ブリスポート、メリー、お婆さんの事がすつかり思ひ出されたのでした。

六

それから間もなくジョン・ハックスフオドは懷しい町ブリスポートへ歸つて參りました。見る物聞く物總ては五十年以前と較べて夢の樣です。唯變らぬ物とては海の在る所と海の色丈であつた。ハックスフオドは僅かに昔の記憶を便りに、海をもとにしてメリーの住んで居た白い家を探して行きました。

『あの時からもう五十年經つて居るのだ。丈夫で居るとしてもきつとすつかり

白髪の婆さんになつて居るに違ひない。否、第一にメリーは此の長い年月、果して俺を待つて居て呉れたであらうか。』

何だかジョンにはメリーが淋しく自分の歸りを待つて居る樣な氣持がしてならなかつた。

恰度昔メリーの家の在つたと思はれる邊りに來た時、ハックスフォドは立派な堂々たる大建築の間に一軒の小さな白い古風な家を見出しました。見ればジョンの記憶に殘つてゐた通りのメリーの家です。お婆さんの家です。

『あゝ、メリーは未だ私の還りを待つて居て呉れたのだ。』

さう思ふとジョンは其處に立つて居る事が出來ず、近くの壁に思はず寄り掛つた。其處へ年をとつた町の漁師らしい男が杖を突きながらやつて來ましたが、ジョンを見ると、

『大分お疲れの樣ですね。お互ひに年とると駄目なものですな。』

『あゝ、有難う。（暫くして靜かに）時に貴老はあそこに見える小さな白い家を……』

『うん、あれですかい。あの家にはね、恐しく頑固な婆さんが居て、どうしてもあそこを離れないんですよ。十倍の金で買取らうと云ふ人があるのに、此の繁華な所に未だあの樣ですよ。』

『何故そんなに強情を張り通すのだらう。』

『それにはね、面白い譯があるのでしてね。あの婆さんの亭主になる男がね、若い時に稼ぎに外國へ出ていつたきりで歸つて來ないのさ。でも婆さん、何時かは男が歸つて來るものと思つて、歸つて來た時の目印にとあの家に住つて居るのですよ。なに、その男なんか、もうとつくの昔にどつかで死んで居るに違ひないんだがね。』

『ちやその婆さんは、死んだかも知れない男をまだ待つて居る譯なんだね。』

『さうされね。（これを強くゆつくりと）別れて以來五十年の間、婆さんは待つて〳〵

待ち暮して、到頭盲目にさへなつて仕舞つた譯さ。』

『えッ？　盲目になつた？』

『盲目になつた許りぢやない。今は死病に取りつかれて、もう永い事はありますまい。ほれ、今も御醫者樣が馬車に乘つて歸つて行きますだ。』

之を聞いたジョン・ハックスフオドの氣持はどうだつたでせう。

『メリーは私を今迄待つてくれた。そのメリーが死ぬ。』（ポーズを置いてもう一度繰り返す）

狂氣の樣に怎う叫びながら、ジョンは一生懸命メリーの家に急ぎました。見れば、何處を如何見ても全然昔の樣子を止めて居ない此のブリスポートの町に、唯一軒メリーの家のみは五十年前とそつくりです。窓もその儘、戸口もその儘、敷石も變らぬ。どれもこれも昔を思ひ出させないものはない。

ジョン・ハックスフオドはその勝手知つた家の戸口をそうつと入つて行きました。そして奥の一間を覗いた。メリーが居る。五十年後のメリーはもう髪毛がすつかり白くなつて居る。顏にはしわが年の經つたのを表して居る。けれども昔のメリーの面影は、はつきりと殘つて居りました。

七

西洋では臨終の迫つた時には牧師を呼んで、その前で懺悔をしたり遺言をしたりするものです。で此の時も既にメリーの前には牧師が來て居りました。靜かに病床の上に起き上つたメリーは傍の牧師に云ひ始めました。

『私の死んだ後は此處には貧しいもので家賃が要らないで助かると云ふ人を入れて下さい。でも此の家の雜作丈は何卒ジョンに解る樣に變へないで下さい。あの人はきつと歸つて來るものと思つて居ります。ですから歸つて參りましたなら、私が怎うして今まで待つて居た事を告げて下さい。けれども、あの人には私が悲しんで苦しんで暮して來た事等は決して云はないで下さい。さもない

とジョンも矢張り苦しむ様になるでせうから。』

戸の蔭からそれを聞いて居たジョンの思ひはどんなだつたでせう。

ジョン・ハックスフオドは思はずメリーの所に驅け寄りました。

『おゝ、メリーさん、よく待つて居て呉れました。ジョンが漸く歸つて來ましたよ。』

『ジョンさん、私は、貴方のお歸りを信じて居りました。』

二人はその儘嬉し泣きに泣きました。暫くしてメリーは、

『私はうれしさで一杯です。唯此の私の目が見えないのが殘念です。でも之も神樣の覺し召しでせう。併し、私には貴方の姿がはつきり思ひ浮べられますから、目で見るのと少しも變りはありません。云つて見ませうか？　あなたは此の棚の（棚を見て指す樣に）二段目までの背丈があつて、身體は矢の樣にしやんとして居り、二つの目は澄み輝いて居ます。髮の毛は黒いと云つて良い程で、口髭も矢張りさうです。殊によると、今は頬髭が生えて居るかも知れません。ね、さうでせう？』

傍で聞いて居た牧師は、自分の前の腰の曲りかけた白髮の老人を見て、笑つて宜いのか泣いて宜いのか分りませんでした。

八

間もなくメリーは死病と云はれた病氣が不思議にも快復しました。五十年の約束を守つて二人は漸く正式の結婚をしました。それからは老先の短い二人ではあつたが、五十年の不幸を一度に取り歸す程の幸福な生涯を送つたと云ふ事です。

○結　び

眞心からの信賴は如何なる困難をも征服する事が出來ます。そして幸福をもたらすことが出來ると思ひます。

昭和二年二月十二日印刷
昭和二年二月十五日發行

【定價二圓】

實演お話集
（第八卷）

著作者　東京高等師範學校內　大塚講話會

發行者　東京市京橋區南鍋町二丁目一番地　隆文館株式會社代表者　星島二郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　君島潔

發行所　東京市京橋區南鍋町二丁目一番地　隆文館株式會社

振替東京八五三　電話銀座二二四一

——共同印刷株式會社印行——

東京高等師範學校 大塚講話會著

實演お話集

定價各二圓　送料各十二錢

四六判各四百頁
クロス上裝函入

本書は東京高等師範學校の先生方と生徒達が、心理や教育の方面から、お話の創作と仕方の研究を目的に組織して居る、大塚講話會の編著ですから、本書のお話は先づ第一に、何れも絶對に安心の出來るお話ばかりです。次ぎに本書のお話は、講話會の會員が、實地に何度も話して見て、よく練り上つたものを書き下したものですから、直ぐそのまゝお話に話すことが出來ます。普通の童話書は、話す爲に書いたものでありませんから、そうは行きません。のみならず本書のお話は、一つ〳〵に仕方の上の詳しい注意が附してありますから、本書によれば誰でも上手にお話が出來ます。第一卷尋常五六年向き、第二卷同上、第三卷尋常三四年向き、第四卷同上、第五卷尋常一二年向き、第六卷幼稚園向き、第七卷青年處女向き、第八卷同上、第九卷話方の研究。

東京高等師範學校 大塚講話會撰

懸賞實演お話

定價各一圓八十錢送料各十錢

四六判上裝函入
各約三百五十頁

實演お話集の姉妹篇

本書は大塚講話會が、一千圓の賞金を懸けて全國の教育者から募集した、實演お話の入選作を纒めたものです。實演お話とは、お話を話す爲のお話を話す爲の臺本でありまして、讀む爲に出來てゐる普通のお話と少々違ひます。お話を話す爲の臺本ですから、話し方の注意も附してあり、第一話すに都合よく出來てゐますから、本書によれば、誰でも上手にお話が出來ます。お話の下手な教育者が、教育者として成功した例がありません。本書を見ると、お話の上手な教育者の苦心がよく分ります。第一輯と第二輯が出來てゐます。

日本童話協會編

日本實演童話集

年刊

定價二圓　送料十二錢

四六判四百頁
羽二重極上裝

本書は、我國童話界の最大中樞機關たる日本童話協會が、現代日本に於ける代表的實演童話家の得意の作品を選んで毎年刊行するものであつて、本集には巖谷、久留島、岸邊の三元老を初め、中堅諸家、新進の雄、凡て二十三氏の本年に於ける會心の傑作を收め、紅紫千態、百花繚爛、眞に斯界空前の偉觀である。卷頭には巖谷重常氏の筆に成る童話術の歷史及び我國童話界の現狀に關する長論文を揭げ、卷末には執筆諸家の略歷を附す。本集の執筆者左の如し。

巖谷小波　岸邊福雄　葛原菡　坂野移文　沖野岩三郎　長尾豐
野邊地天馬〻　樫葉勇　內山憲堂　橫山銀吉　中西芳朗　中根眞雄
佐伯統一　小野田露村　須古清　尾關岩二　飯尾哲爾　樋口紅陽
安倍季雄　新堀哲　鈴鹿正一　蘆谷蘆村　久留島武彥

東京青山師範學校附屬小學校編

尋常小學各科教授細目

定價送料別頁の通り

菊判假一綴
頁數種々

日々の教案は本細目によつて作れ

教案は教育の根本である。良き教案なくして良き教育はあり得ない。故に良き教案を作ることは、良き教育者たるの第一條件である。併し良き教案を作るには、多大なる勞力と時間とを要する。否、多大なる勞力と時間とを費しても、必ずしも良き教案は作り得ない。然るに本細目は、そのまゝ理想的な教案になるといふ長所があるので、本細目を利用する教育者は滔々として增加しつゝある。

東京府青山師範學校

附屬小學校編

修身	國語	算術	國史	地理	理科	綴方	圖畫	裁縫
尋常小學	尋常小學	尋常小學	尋常小學	尋常小學	尋常小學	尋常小學	尋常小學	尋常小學
教授細目	教授細目	教授細目	教授細目	教授細目	教授細目	教授細目	教授細目	教授細目
定價送料	近刊	近刊	定價送料	定價送料	定價送料	定價送料	定價送料	定價送料
一、二〇八			八〇六	八〇六	一、六〇二	六〇四	一、二〇八	四〇四

501
239

[redacted]